

フィリピン、 一期一会の ホスピタリティ

知花いづみ

合計四年滞在したフィリピンでの生活のなかで一番心に残ったのは「ごはん食べたか」(Kumain ka na ba?) という言葉である。職場で同僚と顔をあわせるとき、大学のキャンパスで知人と鉢合わせをした時、帰り道の途中で友人宅に立ち寄った時など、よく挨拶代わりにこの言葉をかけられた。タイミングよくメリエンダ(午前10時と午後3時のおやつ)タイムに重なれば、手持ちのスナックやパンシットと呼ばれる焼きそばのご相伴に預かることになる。朗らかな親密さはフィリピン・ホスピタリティと称され、南国の太陽と同じく暖かい温かみを感じさせた。

自宅に客人を招くことが最大のおもてなしであることは、階層を問わず社会全般で共有されている常識である。大使館勤務時代に上司の抱持ちとして参加したある財閥ファミリー宅での夕食会では、お揃いの制服を着たメイドがずらりと並ぶダイニングルームで何種類にもわたる料理のふるまいを受け、帰り際にご主人の出身地の名産品をお土産として渡されるという歓待を受けた。別件で元下院議長の自宅を訪れた際は(ご本人の過密スケジュールゆえに、お招きを受けたのは開始時刻が午前七時の朝食会であった)、元議長が自らエプロンを着て台所に立ち、ゲストのためにスパゲティを茹でるというパフォーマンス付きの食事が振る舞われた。彼らにとつては馴染みのない日本人の名前でも、会話を交わす際は、瞬時に覚えて一字一句違えずファーストネームで呼びかけ

てくるあたりは、親密さを増幅させる心憎い配慮である。

地方に向くと、こうした歓待のバリエーションはさらにアットホーム感を増す。数年前、マニラから車に乗って約三時間、さらにそこからバンカと呼ばれる小さなボートに乗って約二時間のところにあるミマロパ地方のミンドロ島を訪れた際に、たまたま同じジープニーに乗り合わせ、話が弾んだ少女から「バス停のすぐ隣に家があるので、よかつたら寄って行きませんか?」とお誘いを受けた。初対面なのに図々しいかと思つたが、ちょうど雨が降っていたのもあり、少しの間寄せてもらうことにした。玄関先のポーチで雨宿りをさせてもらっていたら、総勢三家族が寄り添って暮らすニッパハットの入り口のすぐ側に置いてあった大型冷蔵庫の中から、ペットボトル入りのコーラと箱入りのマカデミアナッツ・チョコレートが運ばれてきた。来る途中の道路沿いの露天商では見かけなかったものである。ひんやりと冷えたふたを開けると、なかには最後のチョコレートがふたつ並んで残っていた。日本に帰ればコンビニや自販機でいつでも買えるおやつだが、彼女の村ではなかなか手に入るものではない。「通りすがりの



車のボンネットも一瞬にしてダイニング・テーブルに早変わり! (2011年2月、ヴァレンズエラ市にて筆者撮影)。

私たちがこのようにな貴重なもの頂くなて減相もありません。軒先を貸して頂けただけで十分です。」と言つて辞

退しようとする、「いやいや、外国から来た客に何も出さずに帰すわけにはいかない。」と返され、押し問答となつた。結局、最後は有り難くチョコレートを一粒頂いて、深謝を伝えておいた。次に訪れた同じミンドロ島の別の村では、最近電気がようやく敷かれたというこぢんまりとした清廉な家屋に住んでいる家族を訪問した。玄関先で靴を脱ぎ、きれいに並んだスリッパに履き替えた後に通されたリビング・ルームは、ご当地の民芸品や写真立てに入つた家族写真で色とりどりに飾られていて、ソファに腰を下ろすと長旅の疲れがひととき和らいだ。私たちが到着すると家のご主人はさつそく飲み物を出すよう家人に伝えた。家人が向かつた先には雨水を溜めたドラム缶が置いてあり、足下に落ちていた小枝を拾って缶の縁をカーンと叩くとその波動でボーフラがわらわらと底に沈む仕組みになっていた。柄杓で掬われた上澄みの水を沸かして淹れてくれたのは、フィリピンでは有名な「333」というミルクと砂糖入りのコーヒーである。お茶受けは手作りの黒砂糖入りクレープで、素朴な味がとても美味しかった。マニラで受けた豪勢な歓待ももちろん嬉しかったが、振り返つていつまでも心に残るのは地方の村々で示されたささやかなおもてなしの方である。決して多くのものを所有しているわけではないけれど、いま手許にある最高のもので客人を喜ばせようとする心持ち、普段はごく貴重で手に入りにくいものであつたとしても、そうした事情を一切表に出さず惜しみなく客人に振る舞うフィリピン・ホスピタリティには胸を打たれるものがある。フィリピンをフィールドに仕事をするようになって早一〇年以上が経つが、フィリピン人の心根の美しさから学ばせてもらうことは、まだまだ尽きない。